

よろい  
甲を着た古墳人だより



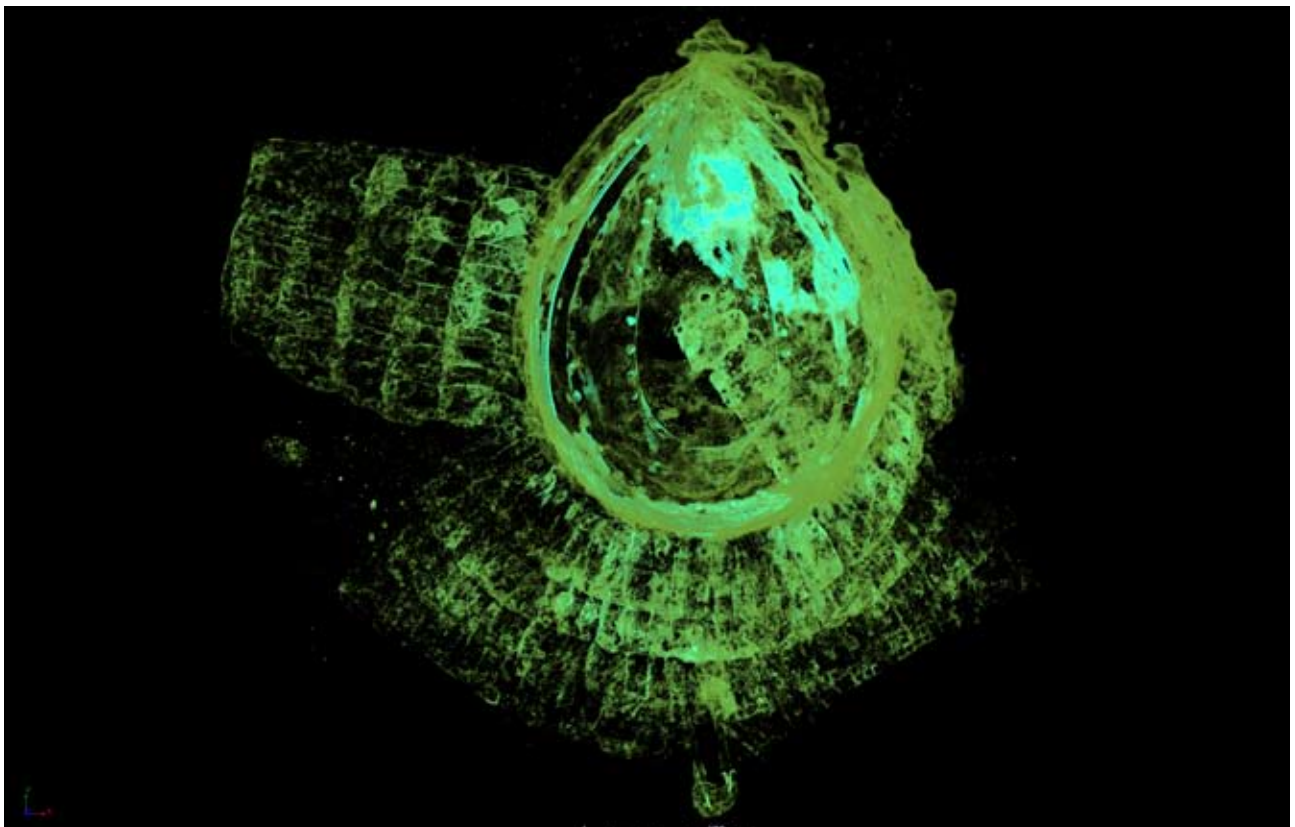
公益財団法人  
群馬県埋蔵文化財調査事業団

甲だけでなく、<sup>かぶと</sup>冑も着けていた！

平成 25 年 5 月に行われた甲を着た古墳人の詳細調査の過程で、頭部の下に鉄製品があることが確認されました。そして 9 月には頭部の状況と鉄製品を明らかにするために CT スキャンを行いました。その結果、驚くべき事実が判明したのです。鉄製品が「<sup>よこはぎいたびょうどめしょうかくつきかぶと</sup>横矧板鋌留衝角付冑」と呼ばれる冑であることがわかったのです。

この冑は、<sup>ひさし</sup>庇の部分が船のへさき（衝角）に似た形をしていることから名づけられたものです。CT スキャンの画像から、本体が鉄板を横方向に<sup>びょう</sup>鋌で留めて形作っていることや、小札で作られた<sup>ほほあて</sup>頬当と<sup>しころ</sup>鋲が装着されていることが確認されました。冑は、顔に接するような位置で、庇を体側に向け球形の部分を上にした状態になっています。

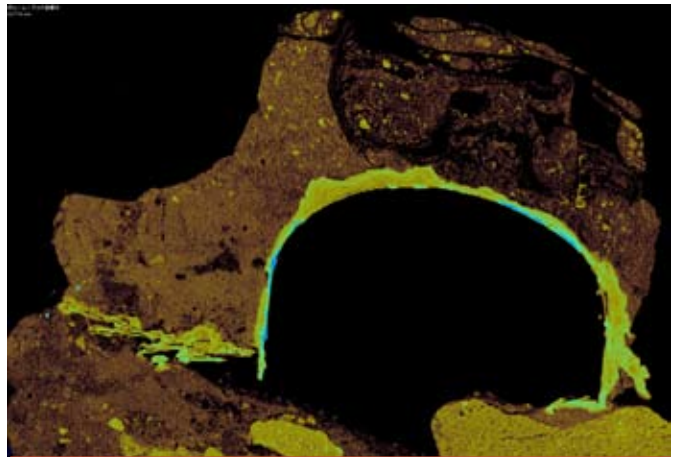
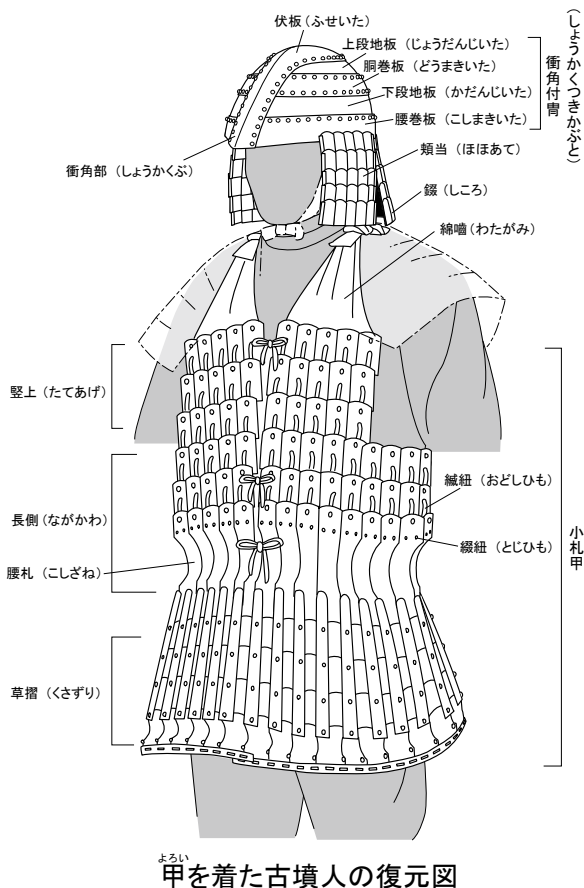
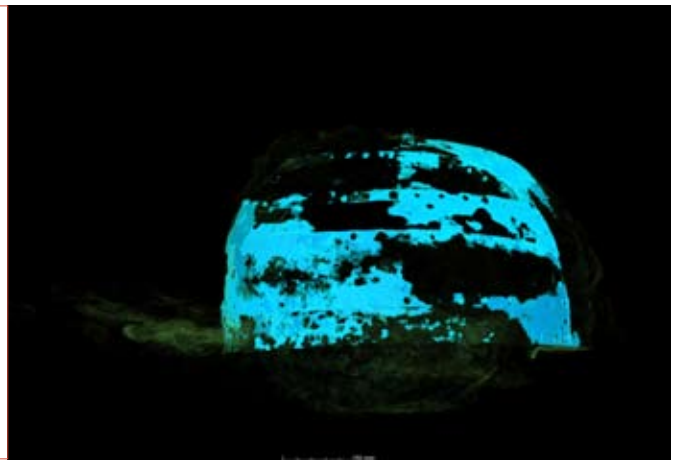
冑の本体は CT スキャンの画像から計測すると、25cm×20cmほどの一方が尖った楕円形で、高さは 13cm ほどです。



① CT スキャンを行うために頭部の周囲を掘り下げたところ、首の下の部分に尖った鉄錆が、顔の両側には板状の鉄錆が確認されました。これは、CT スキャンによって尖った部分が底の部分、両側の板状の部分は頬当てほほあてと鋳しころであることがわかりました。



② 冑かぶとの左側面の画像で、右側が体側です。冑本体が鉄板を横に重ねて鋳しころで留めていることがわかります。下に黄緑色に見える部分が頬当て、左側の黄緑色の部分が鋳しころです。



③ 中央の黒い部分が冑の内部で、周囲の黄色の部分は冑本体の錆、その内側の青い部分が冑本体の鉄の残りの良い部分です。左に黄色く伸びている部分は鋳しころです。また、右上に接するように見える暗褐色の部分が甲を着た古墳人の頭部になります。